印度學佛教學研究第六十七巻第一号　平成三〇年十二月

良忠『観経疏聞書』における来迎思想

西村慶哉

一　はじめに

鎌倉期に多くの法然門流が関東へと下向し、教線を拡大する。一方で法然教義解釈の相違から、法然門流間での教学論争もたびたび発生する。本稿で取り扱う来迎思想についても、東国の親鸞門流間に臨終来迎に関する理解の相違が問題点となっていたことが建長三（一二五一）年付の親鸞書簡（以下、「有念無念」）から窺うことができる。

先行研究では、このような意見の対立は、鎮西派三祖良忠をはじめとした法然門流の関東下向による門弟たちの教学理解の混乱が原因の一つであると推測されてきた。すなわち、建長三年に書かれた「有念無念」にて教誡する臨終来迎の説示と、良忠が建長二（一二五〇）年に下総で撰述した『浄土大意抄』との記述が一致するというものである。[1] しかし、建長頃の東国における浄土教の状況については検討されていない点が多い。良忠においても、『浄土大意抄』との比較が行われるにとどまり、その上、良忠が建長頃に東国で撰述した著作の多くが、未だ翻刻されていない状態である。

そこで本稿では、未翻刻史料の一つである称名寺聖教『観経疏聞書』（神奈川県立金沢文庫管理。以下、『聞書』）を用い良忠の来迎思想について検討し、建長頃の東国における浄土教の状況を明らかにする上で、本書が有用な史料であることを論じたい。

二　良忠の『観経疏』註釈書について

良忠は宝治二（一二四八）年に『観経疏』を講義して以降、善導『観経疏』を幾度となく講義・註釈している。それらの成立について先行研究に諸説あるが、建長六年、七年に成立した『聞書』、弘長二（一二六二）年頃成立の『観経疏略鈔』（以下、『略鈔』）、弘安十（一二八七）年成立の『観経疏伝通記』（以下、『伝通記』）極再治本の三本が現在に伝わっている。他にも良忠には、建長年間成立の『福岡鈔』や正嘉二（一二五八）年成立の『二十五帖鈔』などの『観経疏』註釈書があったことが伝えられるが、現存しない。

『聞書』は、良忠の講義を良聖なる人物が聞書したもので、現存する良忠『観経疏』註釈書の中では成立が最も古い。良忠は建長の初めの頃に東国下総へ入り、正元二（一二六〇）年までには鎌倉へ移住している。すなわち、本書は建長頃の東国において成立した浄土教典籍であり、先述した「有念無念」に見られる東国での来迎理解の問題について、時期的・地域的に重なる史料である。

三　『聞書』の特徴および他書との関係性

『聞書』は、現在「玄義分聞書」三冊、「序分義聞書」一冊、「定善義聞書」三冊が現存する。「玄義分聞書」「定善義聞書」は先述した良聖の書写であるが、「序分義聞書」は袖書や識語がなく書写者は定かではない。いずれにしても良忠の真筆ではないが、思想面より良忠の著作と認められている。紙面には文字の湮滅が目立ち、判読が難しい。そのためか、本書は現在においても未翻刻であり、一部分の翻刻が紹介されているにとどまっている。また、先行研究『聞書』と他の『観経疏』註釈書との関係性についての論考も多く見られる。散佚文献である『福岡鈔』『二十五帖鈔』については、『聞書』と『福岡鈔』はほぼ同内容であり、この『福岡鈔』をもとに『二十五帖鈔』が成立したと推測[2]される。後年成立の『伝通記』と『聞書』については、部分的な比較を行う限り構成・内容と一致している[3]、両書が抜き出して解釈した語句はほぼ同じ[4]と指摘される。『略鈔』についてはその成立に諸説あるが、専門に扱った論考が少なく「今後の研究が俟たれる[5]」のが現状である。このように、『聞書』はいまだ一部分の翻刻しか紹介されず、他の『観経疏』註疏との関係性についても検討の余地を残している。

四　『聞書』『伝通記』『略鈔』における「来迎」の用例

では、実際に『聞書』『伝通記』『略鈔』それぞれに、どのように「来迎」が示されているか。まず、三書の中、どこに「来迎」の用例が確認できるか検討する（「散善義聞書」が散佚しているため、「散善義」は検討の対象外とした）。まず、『聞書』は「玄義分」序題門に二例、定散門に一例、和会門に三例、「定善義」像観に一例、真身観に二例、普観・雑想観に一例ずつ来迎の用例が確認できる。『伝通記』では「玄義分」題号に一例、序題門に二例、和会門に四例、「定善義」華座観に一例、真身観に四例、普観に一例確認でき、『略鈔』では「玄義分」序題門に三例、和会門に四例、華座観に一例、観音観に一例の用例が確認できる。

『聞書』は、後年成立した『伝通記』と内容面・構成面での重複が指摘されてきたが、「来迎」の用例のみに限れば、註釈箇所が一致しないことが窺える。そうであれば、『聞書』

は建長期の東国浄土教における「来迎」について知る上で有用なテキストであると言うことができる。

五　『聞書』における「来迎」の釈相

他の『観経疏』註釈書と比較しつつ、『聞書』に説かれる来迎理解について検討していきたい。

まず、弥陀の来迎について「玄義分聞書」では、「雖二一念一、不レ可レ生レ疑也。」（巻一・五一丁表）であったり、

唯応レ帰二他力往生ノ信一。縦ヒ不トモ学二諸宗教門一、不レ如レ順二ハ二尊ノ密意ヲ一。縦不レ観二三諦ノ妙一、不レ如レ唱二ハ三字ノ名号ヲ一。既二託二必生ヲ於□来迎之蓮一、託ス不捨ヲ於摂記之受一、勿レ疑レ之。

（巻二・四五丁裏、以下訓点筆者、また□は湮滅箇所）

と、何より他力往生の信に帰すことが重要であり、必ず来迎に預かることを疑うべきではないことが示される。

また、来迎仏の身について同じく「玄義分聞書」には、

来迎酬二十九願一ニ故一ニ可二報身ナル一也。酬レ願事雖レ通二報化一ニ四十八願ハ約二報身報土一定判スルカ故也。但□二感見一異者、難二同報一也。随レ機感見不同也。例如下為二十地菩薩一現中十身上也。問。今家意、中下輩ハ化仏来迎[云ヘリ]。是不レ違二本願一歟。答。中下輩ニモ□ニハ報仏也。但約二劣機ノ見一ニ仮ニ為二化身一也。

（巻三・六一丁裏）

と、来迎の仏は十九願酬報の報身であるが、中下輩は劣機であるから化身と感見することが示される。また、この「十九願酬報の報身」等といった表現は、「玄義分伝通記」の対応箇所（浄全②二〇三頁上）では見られないが、良栄『東宗要見聞』に一部が引用される、散佚『二十五帖鈔』の文言（浄全⑪二九〇頁下）とほぼ一致していることが指摘できる。

また諸行往生者の来迎について、「定善義聞書」には、

而ヲ第十九願之時願二来迎ヲ一所対挙二修諸功徳一。其ノ諸善ハ即諸仏生因別願ノ行也。而ヲ仏有レ同有レ異。約スレハ同ノ辺一他仏ノ別願ハ成二諸仏ノ通願一是即総云於別、別云於総ナルカ故也。…難云、第十九願ノ心ハ来迎也。諸善ハ文ニ雖レ挙レ之非二願ノ本意一ニ。如レ是、諸善所成之土ニ臨終之時来迎スル也。若爾ハ観法成スル故ヲ不レ可レ云二十九ノ願力一如何。答。実ニハ如レ難。但来迎ハ依二修諸功徳一修諸功徳従二総功徳一成カ故、正ク依二別願一ニ不レトモ成二此生因一而依二転相成スル一来迎ノ願中ニ挙二諸善成スル相ヲ一総云二十九願ト一也。

（傍線筆者、巻二・五丁裏～五六丁表）

と、十九願は弥陀の別願でみれば来迎を誓った願であるが、諸仏の通願に約せば生因願と見ることができるとの説を出す。これは「玄義分略鈔」にもほぼ同様の説示を見ることができる（浄全②四九五頁上）。しかし、余行については『略鈔』では「余行一一乗仏願生報土」（浄全②四九四頁下）と、余行も報土に生まれることが示されるのみであるが、『聞書』では実際は諸善は十九願の本意でないから諸善所成の土に臨終来迎する旨が示される。両書がそれぞれ「定善義」と「玄義分」の註釈箇所であることに鑑みても、『略鈔』と『聞書』

では釈相の異なることが窺える。

以上のように、『聞書』の文面からは、『伝通記』『略鈔』との共通点・相違点及び『二十五帖鈔』との関係性が指摘できる。また『聞書』所説の来迎思想は、①他力往生の信に帰すことが大切であり、来迎往生を疑ってはならない、②来迎は十九願に酬報され、報身報土である、③諸行往生も来迎往生するが所成の土は諸善所成であると要約できる。一方、先述した親鸞「有念無念」所説の来迎思想（浄土真宗聖典全書②七六八～七六九頁）は、①臨終来迎は、自力であり真実信心を得ていない、②自力行人は、来迎を待たなければ化土すらも生まれることができない、③定散善は全て自力＝諸行往生のことばにおさまると要約できる。このように来迎思想に関して「有念無念」の批判と『聞書』の説示との対応が窺える。

六　おわりに

建長期における東国の浄土教について、『聞書』の来迎思想を中心に検討した。他の良忠『観経疏』註疏と本書とを比較すると、来迎の用例に限れば、構造面や内容面での異同を確認できた。また『聞書』における来迎の特徴を挙げれば、他力往生の信に帰し来迎を疑わないこと、来迎は十九願酬報の報仏報土であること、諸行も来迎往生するが、その浄土は諸善所成の土である。これらの特徴が、「有念無念」が批判する来迎思想とも一致していることは注目すべきである。

このように、建長頃の東国における来迎思想について検討する上で、本書は先行研究を補強する史料と評価できる。また、本書は『福岡鈔』『二十五帖鈔』について考察する上でも注目すべき史料であると考えられる。

1　細川［一九五四］。　2　沼倉（大橋）［二〇一一］。　3　丸山［一九八七］。　4　坪井［一九八六］。　5　沼倉（大橋）［二〇一三］。

〈参考文献〉
細川行信「親鸞消息の研究――特に有念無念の諍論について――」『印仏研』第二巻第二号、一九五四
丸山正博「良忠上人著作の性格」『浄土教論集』大東出版社、一九八七
坪井俊映「金沢文庫蔵「観経疏聞書」の研究」『仏教文化研究』第三十一号、一九八六
沼倉（大橋）雄人「良忠『観経疏伝通記』の異本について」『浄土学』第四十八号、二〇一一
沼倉（大橋）雄人「良忠『観経疏伝通記』の研究」博士論文（大正大学）、二〇一三

〈キーワード〉　良忠、観経疏聞書、親鸞、臨終来迎

（浄土真宗本願寺派宗学院・研究生）